

解説



編集委員会座談会

品質工学の継承と普及 (2)

Transfer and Spread of Robust Quality Engineering (2)

出席者：明吉秀樹（明吉事務所）、植 英規（福島工業高等専門学校）、坂本雅基（花王（株））、高橋和仁（神奈川県立産業技術研究所）、近岡 淳（近岡技術経営研究所）、細井光夫（（株）小松製作所）、見原文雄（元コニカミノルタ（株））、矢野耕也（日本大学）、山村英記（（株）東海理化）、山本桂一郎（富山高等専門学校）、吉原 均（キヤノン（株））

細井（司会） 前回の座談会¹⁾に引き続き議論を続けたい。前回「まっさらな状態で品質工学に接して疑問を抱かなかつた」と話した方が、高橋さん、山村さん、植先生だった。

高橋 矢野宏先生が矢野研究室の技官として「若くてまっさらな人がほしい」と言った。専門技術には専門技術の考え方、フィルタがある。品質工学は評価の学問なので、そのようなフィルタを取り除いて、品質工学の見方ができる人がほしいという意味だったと思う。

司会 矢野宏先生が「40歳を過ぎて品質工学はやれない」というようなことを言った。よくよく聞くと「40歳を過ぎてでも品質工学をやろうとする人は偉い」という話だが、聞いたことがある人は？

近岡 昔から聞いている話である。40歳までにいろいろ経験して、成功体験もあって、その経験が邪魔をする。自分のやり方が身に付いている人に品質工学の考え方を説明しても、自分のやり方と違うという違和感があり、理屈ではなくて感情的に抵抗してしまう。逆に、品質工学の本質的な効用を理解できた人は40歳を過ぎてでも変われる。品質工学の本質を見抜き、かつ、自分の仕事を改革しないとイケないという意識を持つ人は変わっていきえると思う。以前に所属した会社でもマネージャークラスにきちんと説明して普及を図ろうとしたが、中間管理職が一番抵抗する。経営者や役員は納得する。まっさらな若手も納得しやすい。経験を持っていて責任感もあって、自分の成功体験を積んでいるからこそ、品

質工学に入っていけないという方が多かった。

矢野 近岡さんの話と全く同じである。矢野宏がよく企業の40歳過ぎくらいの人に、半ば意図的なのかも知れないが、面と向かって失礼なことを言っている場面に出くわした。40歳過ぎの人は「いろいろ成功体験があって実力がある」と持ち上げる一方で、「そういう人は新しいことをやろうとしない」とも言った。品質工学の考え方が従来の成功体験とは違う思考回路だから、「過去に成功された方は新しいことをやるのが難しい」ということを遠回しに言っていたのであろう。もちろん相手を見て言っていたのかも知れないが、半分は本気で言っていたのではないかと思う。経験上、そこそこキャリアを重ねてきた中間管理職に共通な傾向だったから、そういう言い方をしていたようだ。

司会 田口玄一がデミング賞を取ったのが36歳で実験計画法の第一人者になった。その後、田口は80歳を過ぎてでも進化を求めているように思うが、いかがだろうか？

近岡 田口先生と他の方を比較してはいけない。田口先生は、その時の社会課題や企業の課題にどう答えるか、時代の課題に対して新しいことを考え抜くのが自分の使命であるという気持ちが強かったからこそ、ずっと考えていた。企業に所属していた時に田口先生から「こういう計算でやってください」という指導があって、担当技術者が真面目に計算して次の指導会で出すと「それは間違っています」と言われる。つまり、その1か月の間に田口先生の考え